

## 〈学術研究集会傍聴記〉

## 第45回日本スポーツ心理学会大会傍聴記

山口 慎史\*

Shinji YAMAGUCHI\*

傍聴記の執筆に際し、平成30年度の学内共同研究に採用していただき、心より感謝申し上げます。

2018年10月12日から14日に愛知県にある名古屋国際会議場で開催された日本スポーツ心理学会に参加をした。今期で45回目の大会となるこの学会は、数多くある心理学領域の中ではスポーツ科学に関わる歴史のある学会として有名である。

第45回大会は3日間の日程で開催し、1日目には、スポーツメンタルトレーニング指導士研修会、スポーツメンタルトレーニング指導士資格取得講習会、会員企画自主シンポジウム(テーマ「筋電情報を運動の学習と制御に活かす」「スポーツ心理学領域におけるスーパービジョンに必要なコンピテンシを考える」)が、2日目には、ポスター発表と口頭発表、大会企画シンポジウム(テーマ「日本卓球界復活への道」)、2日目の夜に総会と情報交換会が、3日目には、ポスター発表、学会企画シンポジウム(テーマ「メディアとスポーツ心理学」)、ラウンドテーブル・ディスカッション1~3が行なわれた。

筆者は、筆頭著者として「傷つきやすいアスリートが取りやすいコーピングの特徴」を発表し、共同研究者として「大学生アスリートにおけるレジリエンスが精神的健康に及ぼす影響」「大学生アスリートにおける感情調節が精神的健康に及ぼす影響」「大学生アスリートにおけるソーシャル・サポートと感情調節の関連」「野球選手におけるイップスの発症要因—症例対照研究による外的要因の検討—」「大学生アスリートにおける心理的ストレスがメンタルヘルスに及ぼす影響—反すう思考の媒介に着目して—」「イップス症状をもつ野球選手の身体

的症状と心理的症状の関連」「大学生アスリートにおける Empathizing-Systemizing 認知スタイルが感情調節に及ぼす影響」の合計8演題を発表した。

今回の学術大会では、学内共同研究費(研究題目「大学生アスリートの傷つきやすさがメンタルヘルスに及ぼす影響」)を利用していただき学術大会で発表を行なうことができた。今回のポスター発表では、アスリートの傷つきやすさの程度を3つに分類し、各群によってどのようなストレスコーピング(ストレスへの対処方略)を行なうのか、傷つきやすさの程度によってストレスへの対処は異なるのかを検討した。

日本スポーツ心理学会の学術大会では、研究者のみならず、現場の第一線で活躍する指導者や現役のアスリート、専門職の方の参加や学会発表が数多く見られる。今回の発表においても「部活内に傷つきやすい部員が多いから困っている」「もしかしたら指導者の一言で選手のメンタルを壊すこともあるので難しい」といったコメントをいただいた上で、今回の研究知見をもとにした深いディスカッションを行なうことができた。

数多くある心理学の中でスポーツ心理学は、応用心理学の領域に属している。筆者は、アスリートのメンタルヘルス研究を専門としており、スポーツ心理学と健康心理学の分野の基礎研究を主とした研究を行なっている。昨今、スポーツの分野では、体罰や暴力といったスポーツの価値を損ねるニュースを耳にする。その中で、筆者が行なっている「傷つきやすさ研究」は、実際の現場で悩む指導者やアスリートを1人でも多く救うために、アスリートのメンタルヘルスの不調を防ぐために寄与するものである。今回の学会参加による成果を励みに、今後これまで以上に研究活動に従事していこうと改めて感じる機会となった。

\* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程3年  
Graduate School of Health and Sports Science,  
Juntendo University